校友時報

昭和56年7月21日
編集人兼発行所
秋田県能代市高瑞2番1号
秋田県立能代高等学校新聞部
印刷所㈱大勝堂印刷

期間を四日間に延長

第22回の能高祭は問に演劇教室をはさみ4日間に亘って行われた。一応成功に終わったものの、依然、無関心派が多く、今後に大きな課題を残した。

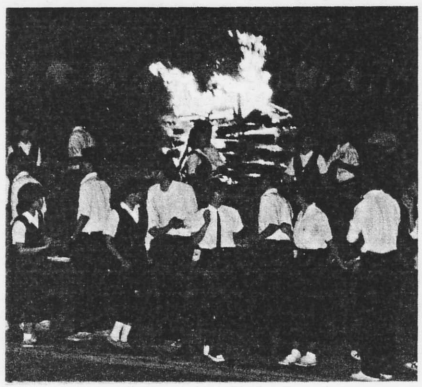
第二十二回能高祭
依然無関心派消えず

生徒会最大の行事である能高祭。今年度は、問に演劇教室をはさみ、六月二十五日～二十八日と四日間にわたって行われた。

共通一次の影響を受けての「早期能高祭」も四年目となって、全校生徒にすっかり定着したようだ。

六月二十五日、前夜祭。ブラスバンドのオープニングのあとで恒例のクラス対抗の「自慢」が行われた。途中、司会進行がスムーズにいかず、場内からは怒りの野次が飛び交った。が出演者の奇抜な装や演出ぶりが、場内をわかせ前夜祭を盛り上げた。

展示、催し物では、夜店、喫茶、フードスタンドなど食べ物を扱ったHRテコが多く目についた。また、HRテコの相撲、個人テコの格闘技研究会によるプロレスのエキサイティングなショーに人気が集まっていた。また、今年はステージ部門がとても好評で、特に歌謡ショーは体育館からあふれるほどの人を集めて、好評を博した。



最後を飾るフォークダンス

六月二十八日、午後四時からグラウンドで後夜祭が催された。今年は仮装行列、フォークダンスの他に、新たに部対抗の「自慢」がとり入れられ内容は盛りだくさんであった。一時小雨がパラついたものの予定通りに進行し、午後八時に、四日間にわたって行われたフェスティバルの幕を閉じた。

準備一ヵ月遅れる

今年の能高祭は一応成功に終わったものの、準備段階に数々の問題を残した。特に、準備開始が遅かったこと、実行委員会と各HRの連絡がうまくゆかなかった事もあり、昨年と比べても一カ月遅れている。また、執行部や実行委員の懸命の活動に対して、肝心の全校生徒が無関心であったことは、今後最も反省すべき点であり、大きな課題となろう。

最後に清水生徒会長が、今回の能高祭について反省も含めてこう語ってくれた。

「全体的に当日は、まずまず成功に終わったと思う。特に三年生は、最後ということもありだいぶ盛り上がっていた。準備段階で、今年は、きりきりになってから非常にあわてた。実行委員の動き出すのが遅れ、またクラスともうまく連絡がつかず、とまどって申しわけない。しかしみんなが協力してくれてうれしい。

来年は、もっと時間をかけて余裕をもってじっくり練れば、絶対成功する。頑張ってほしい。」

（関連記事は二面）

部説　少年よ悩みをいだけ

世間とは勝手なもので、私たち高校生に対して、「若いからどんどん学べ」といってみたり、「若いからもっと遊む。」といえないなろうか。

高校生は、人生のうちで最も多感な時期にあるといわれる。だから、程度の違いこそあれ、だれでも一つや二つの悩みを持っているはずである。その内容は、「進学・就職」や「異性に関するもの」、「性格に関するもの」と人によって様々に違うが、いずれも根本的には青春時代からこその悩みである。つまり、「若いからこそ悩まなくてもいいから」、その道を選ぶのだろう。だが、果して、死の世界へ旅立つことによって、その悩みが解消されたといえるのだろうか。本校には、自殺をした人が二人いた。そこまでいくまで、誰かに相談していたらどうだろう。相談相手はいっぱいいる。友人、親、兄弟、先生、……。悩みは、人に打ち明ければ、きっと解消できるはずである。

だが、自分の力だけでは、どうしても解消できない悩みもある。悩めば悩むほど、深みにはまり、先が見えなくなったりする。そうした時に、死という道を選んでしまう。その道を選んだ人は、これで悩まなくてもいいからと、その道を選ぶのだろう。だが、果して、死の世界へ旅立つことによって、その悩みが解消されたといえるのだろうか。本校には、自殺をした人が二人いた。そこまでいくまで、誰かに相談していたらどうだろう。相談相手はいっぱいいる。友人、親、兄弟、先生、……。悩みは、人に打ち明ければ、きっと解消できるはずである。

悩みを持っている人は、落ち込んでいる。その落ち込んでいる姿は、必死にその悩みを解消しようとしている姿である。そして解消生徒が周人がいた。そこまでいく前に、誰かに相談していたらどうだろう。相談相手はいっぱいいる。友人、親、兄弟、先生、……。悩みは、人に打ち明ければ、きっと解消できるはずである。

とかく、「今の若い者はなっていない。」といわれがちな高校生。物質的豊かさにおぼれて、心に甘えが出来てはいないだろうか。その甘えをなくすためにも、大いに悩むことを尊重したい。

悩むということは確かに苦しいとき、時には傷つくときえもある。だが、その心の傷が回復した時、その人は前より強いになっている。それがたとえ、少しであっても、一歩、一歩、積み重ねてほしい。

かつてクラーク博士はいった。

少年よ大志をいだけ
そして今、もう一つ
少年よ悩みをいだけ

劇団「銅鑼」生きる意味を問う

去る六月二十六日、午後一時から文化後援会事業として、演劇教室が行われた。今年は、能高祭行事に組み込まれ、劇団「銅鑼」による「禁じられた遊戯」を鑑賞した。

劇団「銅鑼」は、一昨年も本校を訪れており、「人間のかしこさ」を主題にしたイソップ物語の飼戒めた劇を上演し、たいへん好評を得た。今回は、ナチス・ドイツによって虐殺されたユダヤ人の生き方（―死に方）を描いた劇で、世界各国、数々の劇団によって上演され、大きな感動と反響を生んだものといわれる。

四人のユダヤ人の子供達と蒸発おじさんが、捕えられ、トラックで死の谷（死体焼却所）に運ばれるまでの遊戯。後半は、この遊戯の中で死を見つめ、そして尚、生きようとしていた。彼らの死までの生き方は、私達に向かって語っているのだろうか。この劇の根本には「人間はどう生きるか」ということがある。

「私達は、両親、先生、そして友達の生き方と対照しながら自分の生き方を決定していく。その中に、この子供達と蒸発おじさんの生き方も加えてもらいたい。」劇団の人達は、鑑賞後に渡されたプリントの中でこう述べている。

そういった内容のため、会場である第一体育館は、全体が暗く重い雰囲気に包まれていた。子供達と蒸発おじさんは、あきらかに死に向かって生きていた。結果がわかっているため、クライマックスの熱演も白々しいようだった。

また、鑑賞後には出演者を囲んでの座談会が行われた。この会では、出演者の演劇部員を中心に、かなり活発な意見の交換が見られた。「劇の内容の深い意味はどんなものか」「役になりきっている役者とは」といった、専門的な話しあいもされていた。出席した演劇部員に感想を聞いてみると「役を演じるうえで、たいへん有意義で参考になった」「芝居は、内容が暗すぎるうえ、意味がよくわからなかったが、いろいろな話を聞くことができたのでとても楽しかった」というものが多かった。

見事な演奏を披露

去る六月二十日、能代市文化会館大ホールにおいて、能高吹奏楽部第十九回定期演奏会が開催されその見事な演奏を披露した。今回も例年通り昼の部と夜の部の二回にわたって行われ、昼の部では客入りがもう一歩だったが、夜の部では、能高生から一般客まで大勢の人が詰めかけ、場内ははぼ満席となった。

演奏会は、四部で構成され、「おんなを間記」のテーマをオープニングにやまと十五曲が二時間半余りにわたって行われた。

まず第一部では、FM放送日曜朝の"ブラスのひびき"のテーマとして知られている「素晴らしきヒコーキ野郎」など私達が日常聞きなれた曲を集め、第二部では交響曲を披露、そして演奏会のハイライトともいえる第三部のビックバンドではスタンダードやフュージョンナンバーをとり入れ、更にスタンドプレイなどを盛り込むなどシンフォニックバンドにはない音楽の醍醐味を味わせてくれた。第四部は、吹奏楽部の自慢曲を集め、毎年演奏している「栄光への脱出」でプログラムが終了したが、大拍手が起こりアンコール曲二曲が演奏され幕を閉じた。

会場を沸かすスタンドプレイ

高校総合文化祭　七人が入賞する

六月上旬から中旬にかけ、県教育委員会ほかの主催で、"秋田県高校総合文化祭"が県立美術館で開催された。

本校の美術部と写真部からも、何点かの作品が出品され、このほど、美術部門では、三Dの森谷君の「コーヒースクラップ」という作品と二Aの堀内悦子さんの「ねぐらS」という作品が入選し、また写真部門では、三Dの森宣也君の「まぢかみ」という作品が推奨に、二Aの写真金君の「落日の海」という作品が推奨に、その他三点の作品が選に輝いた。

受賞の喜びと今後の抱負について、森谷君は、「正直言ってあまりうれしくない。準備期間が短かったし、絵の中で自分が何を描きたかったのかということがぜんぜんわからなかった。受賞するしないはともかく自分としてはあまり納得のいかない作品だった。また興味ある素材を取り上げてやってみたのだが、それを深く掘りさげることができなかったことがなによりも悔やまれる。今後は、基礎をもう一度はじめからしっかりやり直して作品に取り組みたい。」と。そして、森君は、「受賞できて本当にうれしい。今後は、雑誌などに応募し写真と真剣に取り組みたい」と語ってくれた。また、二人共、「後輩には自分と悔しの残らないようにしっかり勉強して納得のいく素晴らしい作品を作ってほしい」と熱意を込めて語ってくれた。

出来事

将棋

七月十日、駅新報社主催、第九回全県高校将棋大会に本校将棋部が参加した。結果は次の通りである。

▽団体戦準決勝
横手B 2－1 能代B
▽同三位決定戦
大館鳳鳴A 2－1 能代B
▽個人戦準々決勝
伊藤康尚（横手）
○－× 松本総一郎（能代）

放送

六月二十五、二十六日の両日にわたって全国放送コンクール県予選が秋田市文化会館で行われた。この大会には県内三十六校が参加し、本校からはアナウンス・朗読・ラジオ部門に出場した。結果は、「博樹聞いてくれ」でラジオ部門入選を果たした。

献血

去る六月二十二日本校に献血車が来校し、百八十五（二年生七十四名、三年生八十九名、先生二名）名が献血した。今回は昨年（百七十八名）を下回り、もっと多くの協力が望まれる。

季節の窓

一点

▼「髪が長ければ『先生頼む』、非行があれば『学校で何をやっているのか』、また家では『勉強しろ、塾へ行かせろか』、本来教育は学校で、しつけは家庭で、であるものが、最近になってきている「ことどもにかける期待が大きいあまり、つい無理を要求する。その結果アンバランスな成長を遂げ、社会に適応できなくなるような子供が増えつつある」。これは、ある地方新聞に載っていた記事の内容である。校内暴力や未成年者による犯罪が跡を絶たない今日、親として不安を感じないではいられない。▼先月千葉で、中三の少年が、通りがかりの小六の少女を刺殺する事件があった。捜査本部は、「ムシャクシャがこうじたため」ではないかとみているそうだ。憂さ晴らしのために殺人？このようなことが平気で新聞に載せられるようになったり、またそれを平気で読み流されるようになることが、たまらなく恐ろしい。また今月に入ってからも、愛媛で、際を断われた女子高生が相手の男子生徒を刺す、という事件が起きている。酒は違うが、この二件とも「自分の思い通りにならない」ことが、少なからぬ原因になっているのではないだろうか▼我々は、ともすると自分中心に世間を動かそうとする。無理でも自分の考え通りにしようとする。当然自分のこと以外のことは考えず、かといって本当に正しいと信じているかといえば、そうでもない。「思いついたらつっぱしるのが若者」と言われるが、これではつまらぬ片意地を通しているようなものである。今の我々に必要なのは、自分の本当をしっかり見つめることではないだろうか。そしてその上で、世間の言葉に耳を傾けることではないだろうか▼校内暴力や未成年者による犯罪などは、今や見慣れたものとなりつつある。しかし、我々は笑って見流すわけにはゆかない。"不安な世代"と言われているのは、今の我々なのである。